

大藪輝雄教授退任記念論文集の刊行にさいして

経済学部長 奥 地 正

大藪輝雄先生の定年によるご退職にさいして、『立命館経済学』において退任記念論文集を特集し、ここに刊行することになりました。

大藪先生は1995年3月31日をもって、定年によって立命館大学教授の職を退かれます。先生は1956年4月に、立命館大学経済学部助手として就任されました。それ以来今日まで39年の長きにわたって、立命館大学および経済学部の発展のために尽力してこられました。この間の先生の多大のご功績をたたえ、そのお人柄を敬愛し、ここにささやかながら記念論文集を編集・刊行し、先生に贈呈することになりました。

大藪先生は1929年に朝鮮の平壤（現・朝鮮民主主義人民共和国のピョンヤン）でお生まれになり、戦後、旧制の高松経済専門学校を経て、1950年に京都大学経済学部に入學されました。京都大学では農業経済学を専攻され、大学院を経て、1956年に立命館大学に助手として赴任されました。以来39年、1960年に助教授、69年に教授に昇任されましたが、この間一貫して農業経済論の担当者として学部および大学院の教育に当たられる一方、研究面では東西ドイツやECの農業・農業政策の研究と、それとの対比・関連において戦後日本農業の現状分析を行ってこられました。1967年10月から1年間はドイツのゲッチンゲン大学に、88年10月から半年間は同じくフンボルト大学およびケルン大学に留學され、国際的な研究交流を果たしておられます。

大藪先生のご研究は、まず第1に旧東ドイツ農業の史的発展の研究に向けられました。その問題意識は、戦後アメリカの占領下で実施された日本の農地改革を念頭におきつつ、ソ連の占領下で実施された「民主的土地改革」がどのようなものであったかを明らかにすることでした。この領域では、まず16世紀以降の「グーツヘルシャフトの成立」に始まり、次いで19世紀ユンカー経営の資本主義的な発展過程における「東エルベ農業労働者の状態における発展諸傾向」が、そして戦後は「東ドイツにおける民主的土地改革と農業の社会主義化」が追究されました。

第2は、旧東ドイツと異なり農民的経営が支配的な旧西ドイツとECの農業・農政の研究でした。旧西ドイツでは1955年に農業法が制定され、高度成長の展開に伴う農工間の不均等発展の激化と構造政策の推進は、日本の農業基本法（1961年）のモデルとなりましたが、さらに旧西ドイツを含むEC共通農業政策の形成は先進資本主義国の農業政策として注目されるべきものでした。こうした過程を大藪先生は、「西ドイツ農業の展開と農業政策」、「EEC農業市場の形成とマンスホルト・プラン」、「自給率を向上させたECの食糧確保政策」など、一連の論文によって追究されました。

第3の研究分野は、戦後日本の農業と農業政策にかかわるものです。この領域については、農地改革期では「京都における農地改革と農民的土地所有の成立」、基本法農政期では「近畿型農業における農家滞留構造の一形態」、「現段階における農民層分解の特徴」、現在の農業新政策期では「国際化の中の日本の食糧」、「日本農業の危機と農業政策」などによって、研究が積み重ね

られています。今日、日本農業の危機は一段と深まり、1993年の米の“ミニマム・アクセス”受け入れと94年の食糧管理法廃止、新食糧法制定によって新しい段階に入っており、まさに日本の農業は「存亡の危機」にあります。こうした時にドイツやECの農業・農政と対比しつつ、広く国際的見地から、また歴史的視野をもって日本農業の現状を分析され、日本の農業・食料問題の危機打開の道筋を探ってこられた先生のご研究から、私たちが学ぶものは少なくありません。

他方、大藪先生は、学外にあっては京都府農業会議常任議員、京都府都市計画審議会委員、同公害対策委員会委員などを勤められる一方、学会では土地制度史学会理事・評議員、日本農業経済学会理事などを歴任され、また、学内においては教学部長、二部協議会委員長、経済学部長などの要職を歴任され、立命館大学および経済学部の今日までの発展において大きな足跡を残してこられました。まさに本学経済学部の重鎮であります。

今日、21世紀を目前にして、国際化・情報化・人間化・個性化やグローバル化・ボーダーレス化・ローカル化などが言われる中で、これからの大学における研究と教育、そして経済学と経済学部の在り方について、広く深い問い直しが必要となっていると思われます。こうした課題にどのように対処すべきかを、また、21世紀を目指して経済学部の根本的な改革をも考えなければならない時に、先生のご退任になることは経済学部にとって誠に惜しい限りではありますが、これも時の定めかと思われます。

幸い先生はお元気であり、ご退職後も今年4月から本学の特別任用教授に就かれます。今後とも一層のご指導とご鞭撻をお願い申し上げるとともに、先生のご健康に十分に留意され、新たなご活躍を展開されますよう心から祈念して、送別の言葉といたします。

1995年2月